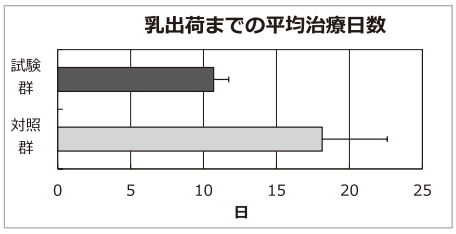
「乳房炎治療の補助薬」マストリチンに期待

昨年の夏は、残暑が例年になく長引きました。その結果、暑熱ストレスによって牛の飼料摂取量が低下して乳房炎が増加しました。こうした中、酪農現場のあちらこちらで、「乳房炎が増えて困ったな…」、「とにかく涼しくなるまで耐え凌ぐしかないかぁ…」という会話がありました。酪農は乳房炎さえなければ、こんなに儲かる仕事も他にないでしょう。しかし乳房炎は、少なくすることはできてもゼロにすることはおそらくできないでしょう。そのため常日頃から酪農家と獣医師は、乳房炎の早期発見・早期治療・早期回復に協力して乳房炎防除に注力しています。

さて話は少し変わりますが、「GUMデンタルペースト」は、歯の病気である歯周病を予防する歯みがき膏です。歯周病はプラーク（歯垢）の中の歯周病菌がハグキに炎症を起こし、徐々に周りの組織を破壊していく細菌感染症です。一方、牛の乳房炎は乳腺組織内にバイ菌が入り込んで炎症を起こし、体細胞の増加や乳量を減少させる細菌感染症です。つまり、どちらも細菌感染で起こる病気といえます。

細菌感染症の治療は、感染によって起こる炎症をいかに早く鎮めるかが重要となります。そこでGUMデンタルペーストは、炎症物質の発生を抑えるために「グリチルリチン」という抗炎症剤を含んでいます。グリチルリチンは漢方薬の一つである「甘草」から抽出され、多くの医薬品に使われています。

ここで疑問に思うことは、牛の乳房炎では抗生物質治療が主体となっていますが、なぜ抗炎症作用のある薬が使われてこなかったのでしょうか？　乳房の炎症を抑える治療は、感染症治療の考え方からみると理にかなった方法です。そこで開発されたのがグリチルリチンを主成分とした乳房炎治療補助薬の「マストリチン（共立製薬）」です。



それでは、マストリチンを使った試験を報告します。

乳房炎の初診時において、試験群はマストリチン（初診のみ）とマストップLを、対照群は生理食塩水（初診のみ）とマストップLを乳房内注入してもらい、その後は両者ともに検査結果に基づいた乳軟注入治療だけを行いました。結果、試験群は対照群に比べ牛乳出荷までの日数が短縮する傾向が認められました（図）。つまり、「乳房炎が少し早く治った」ということ。

今のところ症例数が少ないので断言できませんが、抗炎症作用のあるグリチルリチンは炎症物質の発生を抑えて治癒を促進する可能性が推察されました。今後、乳房炎治療のスタンダードになる可能性があるので、この調査をさらに続けてみようかと思っています。

ただし、マストリチン（1本912円）は給付制限が多いので、原則として保険給付外となります。詳しくは獣医師職員にご相談ください。

次は標茶診療所の高尾獣医師にバトンタッチします。

（西部診療センター　音別白糠家畜診療所　診療課　寺﨑　信広）